

## 第3回山形県環境教育推進協議会 会議録

1 日時 平成25年1月24日(木) 午後2時~午後3時55分

2 場所 山形県測量会館2階会議室

3 出席者等(敬称略)

(1) 出席委員

|       |       |       |        |       |
|-------|-------|-------|--------|-------|
| 今村 哲史 | 大熊 幸子 | 白壁 洋子 | 二藤部 真澄 | 大泉 徹  |
| 佐藤 真人 | 板垣 巖  | 安積 力也 | 岩沢 ちか  | 大澤 賢史 |
| 阿部 利春 |       |       |        |       |

(2) 欠席委員

松田 一彦

(3) 県関係課

|                           |       |
|---------------------------|-------|
| 教育庁生涯学習振興課課長補佐(生涯学習担当)    | 伊藤 吉樹 |
| 〃 義務教育課指導主事               | 樋口 潤一 |
| 〃 高校教育課指導主事               | 高橋 俊彦 |
| 環境エネルギー部水大気環境課課長補佐(水環境担当) | 佐藤 貢一 |
| 〃 循環型社会推進課課長              | 中川 芳則 |
| 〃 みどり自然課課長補佐(みどり環境担当)     | 横倉 肇  |

(4) 事務局

|                 |       |
|-----------------|-------|
| 環境エネルギー部環境企画課課長 | 高橋 康則 |
| 〃 課長補佐(環境政策担当)  | 鈴木あけみ |
| 〃 主事            | 木方 道子 |

#### 4 会議の概要

##### (1) 開会

##### (2) 挨拶

環境エネルギー部次長から協議会開会にあたり、挨拶がなされた。

##### (3) 協議

山形県環境教育等行動計画（仮称）（案）について

事務局から、資料について説明がなされた後、各委員が意見交換した。意見交換の内容は以下のとおり。

#### < 各委員の意見 >

|      |  |
|------|--|
| 今村会長 | 前回までの意見を反映させた部分、追加あるいは訂正、その他質問・感想等を含め、御意見を伺いたい。  |
| 白壁委員 | 資料2の15ページに記載されている森の案内人や地球温暖化防止活動推進員などにもならず、一つのまとまった団体などにも所属せずに活動している方々もたくさんいる。例えば、日本自然保護協会の講習を受けた自然観察指導員やネイチャーゲームの講習、試験を受けた指導員、学校林の森林環境学習を支援して下さる地域の方など、様々な方々が活動している。人材育成の部分に、そのような方々の力も借りながら、一緒に環境教育を進めて行こうという記載があった方がよい。一同に会する機会を設け、この行動計画の趣旨を共有していく必要があるのではないか。 |
| 今村会長 | そのような交流会を単発ではなく、例えば、毎年実施している環境イベントの中で環境教育の集まりが必ずあるなど、環境の人材の交流、ネットワーク構築のための情報交換の場を設けるということは、人材活用と育成の部分に明記して欲しい。<br>関連して、資格などを持っていなくとも環境に関する活動をしている方々を幅広く把握することも課題に挙げていただきたい。難しいと思うが、ボトムアップ型の環境教育を考えるのであれば、そういう方々も大事にしていきたい。   |
| 安積委員 | 資料1の基本的な考え方1(1)「環境教育を通じた環境の人づくり」という文章について、「環境の」という言葉がなぜ入っているのか。環境教育は、行政の立場からすると持続可能な「社会づくり」が目的となるのだろうが、教育の立場からすると、「人づくり(人間の形成)」が中心目的となる。基本的な考え方で、山形県の環境教育では人づくりを目的とするという特色ある位置付けをしようとしている。 そうであ  |

|                    |  |
|--------------------|--|
| <p>環境企画<br/>課長</p> | <p>れば、「環境の」という言葉はない方がわかりやすいのではないか。<br/> もう一点、これも言葉の問題だが、資料1の基本的な考え方1(3)「環境教育において推進する手法」というこの表現は、環境教育そのものを推進するという意味で書いているならば、「において」ではなくて「を」ではないか。</p> <p>1点目については、昨年3月に、第3次山形県環境計画を策定する中で、「環境」に係る様々な活動を推進していく人づくりをするということを強調するために、「環境の人づくり」という言葉を使っている。確かに安積委員がおっしゃるとおり、環境教育と並べて使うと誤解を招くような表現になってしまうとも思う。環境計画との言葉の整合性も含め、検討させていただく。</p> |
| <p>事務局</p>         | <p>2点目については、資料4の8ページ、一番左の国の新しい基本方針の ア「環境教育を進める手法の考え方」に対応している部分である。</p>   |
| <p>今村会長</p>        | <p>「環境教育を進める手法の考え方」に対応しているということで、「環境教育を推進する手法」に直していただきたい。</p>  |
| <p>板垣委員</p>        | <p>関連して、資料1の基本的な考え方1(2)「環境教育に求められる要素」について、「求められる」というのは非常に硬い言葉である。「環境教育の要素」ならばコンパクトで分かりやすいのではないか。<br/> また、安積先生がおっしゃったことに同感で、「環境の人づくり」とはなんだろう、非常に分かりにくいなと思っていたが、先程、事務局から説明があったように、上位の計画にある言葉をそのまま使っているので直らないのではないかと思っていた。</p>  |
| <p>今村会長</p>        | <p>趣旨が変わらなければ言い方を変えてもよいと思う。わかりやすい表現を検討いただきたい。</p>  |
| <p>環境企画<br/>課長</p> | <p>趣旨は同じだが、とにかく「環境」を強調しようとしたことで、逆にそれがわかりにくくなっているという御意見を踏まえて、表現を検討させていただく。</p>  |
| <p>岩沢委員</p>        | <p>「基本的な考え方」の中で、人づくりというのを一番大事にしているし、「要素」では、「豊かな環境とその恵みを大切に思う心をはぐくむ」とか、「いのちの大切さを学ぶ」ということを一番に挙げているのは、私達が携わってきた社会教育とか生涯学習の分野と共通している。環境教育を進めるに当たって、今後、社会教育とどのように連携していくのか。推進体制等にも読み取れるような記載がない。</p>   |

|            |   |
|------------|---|
| 環境企画<br>課長 | <p>岩沢委員からお話があった家庭や地域における環境教育の推進は、公民館の活動が大変重要だと考えている。どのような場でどのような環境教育を進めていくのかを整理して記載する。</p>  |
| 二藤部<br>委員  | <p>先程の白壁委員の御意見とも共通するが、資料2の16ページの「情報の提供」について申し上げたい。私達、NPO法人「環境ネットやまがた」では、県環境学習支援団体の認定を受けており、パンフレットでPRしていただいている。それを見た方から講座開催の問合せがあったりする。ただ、他にもたくさんの制度があり、それぞれで冊子を作ってPRしている現状がある。夏休みに親子で体験活動ができる場所だとか、テーマごとなど、一体的な情報提供を行っていただければと思う。</p>   |
| 大熊委員       | <p>私は、4歳の子どもがおり、家庭での環境教育が大きな要素だなと、家庭では何ができるだろうか、とずっと考えてきたが、やはり家庭では毎日の食が一番大事だと思う。</p> <p>先日、有機農法を推進している農家の皆様との会合があって、その際にお聞きした話にとっても感銘を受けた。農薬を使わないで、つらい草むしりを続けているのは、身体にいいという食べ物を作ろうという意識だけではなく、里山を守っているという意識からだ伺った。先祖からいただいたこの土地で、この環境を守りながら生産された農作物がもっと流通していくと、山形の環境はもっと守られるんだということをもっと県民の方に何とか知っていただきたい。山形県はつや姫をはじめとして、さくらんぼやその他フルーツなど、様々な農産物の特色があるので、地産地消から一歩進めて、山形では環境を守るために地産地消を応援しているという環境教育も絡めたわかりやすいメッセージを家庭の主婦の方に届けることができればと思う。また、ごみを減らすことも家庭の重要な役割だと思うが、こういう野菜を買えば、皮を捨てずに済むし、おいしく食べれば残さずに済む。</p> <p>こういった環境教育も山形らしさではないか。すでに農業関係で施策があるかと思うが、これを売りにして他の県からも沢山の方にお越しただければ、だいぶ山形県の発展に繋がるのではないか。</p> |
| 今村会長       | <p>資料2の中の、親子で環境について学ぶ機会の充実の中に、食から考える地域の環境という視点の記載をぜひ加えてはどうか。県としても農政に関しては力を入れられていると思うので、山形らしくていいと思う。食と里山の関係性について幼児期と学童期、特にしつけの一つとして意識付けができれば、大人になってからの消費行動に繋がっていくのではないか。</p>   |

|        |  |
|--------|--|
| 白壁委員   | <p>資料2の17ページに「環境保全に係る協定の締結等」という図があるが、今現在こういう事例はあるのか。また、図の中に「NGO等」とあるが、NPOではできないのか。</p> <p>また、行動計画を策定した後、どのように行動として進めていくのか、わかる範囲で教えていただきたい。</p>   |
| 事務局    | <p>前段について、この協定の締結の制度は、今回の法改正で新たに設けられたもので県内では、まだ事例はない。法改正前からは、エコ・ファースト制度という国と団体間の認定制度がある。図は、環境省の資料をそのまま引用しているため、このような表記になっている。NPOでもできるので、NGOはNPOに修正させていただく。</p>   |
| 環境企画課長 | <p>後段の、これからの進め方については、資料3に、行動計画をベースとした具体的な取組み例を挙げさせていただいた。今後、市町村や環境学習支援団体と意見交換や情報共有の機会を持ちながら、県で予算要求、事業化して進めていく。また、資料2の3ページに、学校における環境教育の在り方を示すものとして、山形県環境教育指針を挙げているが、これを来年度、改訂する予定と聞いている。その中で学校における環境教育の取組みは、推進されると思っている。</p>  |
| 今村会長   | <p>行政だけでなく、民間団体などと意見交換する場を定期的に持ってもらいたいと思う。</p>   |
| 大泉委員   | <p>資料1の「基本的な考え方」1(2)の要素で、「・豊かな環境とその恵みを大切に思う心をはぐくむこと」、「・いのちの大切さを学ぶこと」を最後の1、2番目から最初の方に持ってきていただいた。また、3番目の「・自ら考え、判断、行動する機会を与え、自発性を育てること」については、前回の協議を受けて、今回、追加していただいたようだが、今の学習指導要領では、「思考・判断・表現」という、行動して自分から主体的に発信していくことを大切にしているので、これらを3点を最初にさせていただいたのは良いと思う。</p> <p>学校現場でも、環境教育を改めて考えていけないなと思った。社会、理科、家庭科、図工なども関係するし、保健体育も色々関わっている部分がたくさんある。小学校の場合だと、いつも学校全体を挙げての大きな活動は難しいが、自分達の暮らしのなかで、自分達が働きかけて生活を良くするというのを、今、申し上げた教科の中で十分育てていけるのではないか。その際には、県環境学習支援団体の方からも教えていただいて授業に反映させていくのも、とても大切だと思う。</p> <p>また、少年自然の家を、学校は利用させていただいているが、自然での体験学習に森林保全的な新たなプログラムを考えて、学校の貴重</p> |

|        |  |
|--------|--|
|        | <p>な校外学習として反映させていければと思った。例えば、私も間伐体験をしたことがあったが、とても貴重な体験だった。直径5センチくらいの枝を落とすだけでも、本当にいいのだろうかとドキドキしながら切った。これはきちんと将来的に、森の保全に繋がるんだと学習をさせてもらった。子ども達は、自然は大切だから、間伐や草刈なんてしてはいけないことだともしかしたら思っているかもしれない。</p>  |
| 今村会長   | <p>先程お話のあった、山形県環境教育指針の改訂で反映させていただければと思う。</p>   |
| 佐藤委員   | <p>資料1について、今後、いろいろな場面で使用されるのだと思うが、基本的な考え方1(1)「環境教育を通じた環境の人づくり」というところに、「山形への愛情を持った人」という言葉がクローズアップされており、非常に特色が出ているなと感じた。その反面、今まで環境教育では、大きな視点で見て、実践は足元からと言われてきており、日本の国としての視点とか、地球という視点を持ったうえで、山形に住む者として、どう取り組んでいくのか記載が必要ではないか。資料2の4ページ、5ページに対応する部分があるので資料1にも盛り込まなくていいのか。</p> <p>また、資料2の10、11ページの「学校における環境教育」について申し上げたい。10ページの【現状と課題】で、平成22年度の子どもの環境学習調査の結果として、学校で環境教育に関する全体的な計画を策定しているのは5割というのはおかしい。平成19年に県では環境教育指針を作成し、県教育センターで指導しており、ほとんどの学校で全体計画は作られているのではないか。高校についてはわからないが、小中学校ではいのちの教育の全体計画の中に環境教育という視点も位置付けられている学校も多い。「環境教育に特化した全体計画」としてとらえて、作成していない、と回答しているのではないか。また、11ページの【推進施策】の3番目の と4番目の が、前回の協議会の意見を受けて盛り込まれたと思うが、一番上の の一文、県教育委員会での山形県環境教育指針の改訂に含まれているのではないか。平成19年の県環境教育指針には、この内容が盛り込まれていて、全く関連付けを働きかけていない訳でもないのに、特に強調するため、ここに記載するのであれば、「強化していく」とか、「取組みをもっと推進していく」とか、そういう書き方・表現にした方がよい。</p> |
| 環境企画課長 | <p>最初の資料1については、この計画の特徴的なところ、強調したいところを抜き出しており、国の方針については記載を省略させていただいていた。わかりにくい部分を整理させていただく。</p> <p>2点目について、資料2の10データは、第3次山形県環境計画の策定の際に、学校にアンケート調査した結果である。学校現場で、どの</p>  |

|             |  |
|-------------|--|
|             | <p>ようにとらえられて回答されたかは分からない。掲載については、再度検討させていただく。11 ページの【推進施策】の3、4番目は、佐藤委員からお話があったとおり、来年度の指針を策定する中で検討していただく中でぜひ強化すべきと考えており、特にこの計画の中でも位置付けて置きたいとして盛り込んでいる。表現は整理させていただく。</p>   |
| <p>今村会長</p> | <p>今の【推進方策】に関しては、佐藤委員もおっしゃったが、「充実させる」など、もう一步踏み込んだ言葉であれば、載せていて良いと思う。</p> <p>それからアンケート調査結果については、行事として、きちんと目立つような形として、顕著な計画を策定している場合だけ「策定している」と答えられると、とらえられたと思う。普通に環境問題とか環境のテーマを取り扱わない授業は、特に理科や社会など、基本的に無い。このデータを記載するかはご検討いただきたい。</p>   |
| <p>安積委員</p> | <p>佐藤委員の先程の指摘は私も心から同感した。英語で言えば、「Think Globally, Act Locally」という有名な言葉がある。考えるのはグローバルに考える、そして行動は、いまここで生きている場所のリアリティの中で考え、実行する。このような基本的姿勢はすごく大事だと思う。山形への愛情を持った人というのは、山形の自然と風土と人への愛を持った人間を育てるんだという趣旨なのだと思う。「Think Globally」を人間教育の普遍的な言葉に置き換えて、例えば、「自然と人を愛し」を入れて、そして、「山形への愛情を持った人」という言い方をすれば、山形だけではないんだという解釈が一つ可能である。山形県だけではなく、まさに環境教育の基本はお互いの違いや利害やイデオロギーを超えて、地球そのものを大切にしないと人類は滅亡していくんだという危機意識の共有なので、どんな立場の人も大事にしあえるものを大事にするというような視点の言葉が必要だと思う。郷土だけを愛せばいいのではない。山形県民は、非常に普遍的なグローバルなところに関われた視点にしっかり立ちながら、今生きていくこの山形の自然と風土を愛する人を育てるというのが、この計画の大事な特色だと思う。やはり、ここには、何か今申し上げたような趣旨の言葉を入れた方がよい。</p> |
| <p>今村会長</p> | <p>佐藤委員、安積委員の御意見を踏まえて、資料1の「基本的な考え方」1(1)の部分には、世界的な視野で考えて行動できる人づくりについて、何らかの形で記載いただきたい。</p>   |
| <p>阿部委員</p> | <p>県環境科学研究センターは実行部隊ということで、例えば、資料3の一番下の、「生活環境の保全」に記載されている事業を実際に行って</p>  |

いる。

そのような立場から、実施する際の課題や問題点を具体的に申し上げたい。1点は、二藤部委員からも御発言があったが、資料2の16ページに情報の提供について、県民の利便性を図るという意味で、県のホームページの一番上の入り口あたりにですね、環境教育の窓口のリンクでも設けて簡単に情報に行き着くようなことができればと思う。実際、私の環境科学研究センターの方に寒河江の公民館の方から研修について連絡があって、色々お話を聞いてみたところ、中身は工業振興課で実施しているサイエンスナビゲーターの申し出だったということがあった。結局この資料の中でも、環境学習支援団体の講座、サイエンスナビゲーター、私の方の環境アドバイザー、出前講座など、色んなところで色んな事業をやっているが、どこをどう見たら求める情報があるのか分らないというのが実態である。

また、担当職員から聞いた話では、学校については、一生懸命な先生と全くやる気の無い先生との差が激しい、それはなぜか、先生個人のやる気かということ、校長の方針もかなりあるんでしょね、という話だった。例えば、高畠町は、県の中でもトップレベルで環境教育を実践していらっしゃるが、村上さんという一生懸命な方がいる。私のところの一番の悩みは、環境アドバイザーや教材など提供するものは揃えていても、やる気の無い方は全く来ないことである。やはり子どもからの、教育というのは、大事なんじゃないかと思う。学校でも環境の時間を必須ににしてはという話もあった。熊本ではそういう授業があると聞いたことがある。そういう形で時間を割いてもらえば、やる気のある先生が非常に苦労してプラスアルファで実践しているものを標準化できるのではないかと思う。

今村会長

後半については、文部科学省の教科の関係がありますので、なかなか難しい。後は学校でどういう特色を打ち出すか、校長先生や、学校教育全体の話合いの結果が骨子になっていくので、そこで環境という取組みが一つ、二つと増えていくのを地道に待つしかない。私は、大学に所属しているが、大学も含めてそうである。

前半については、環境科学研究センターには、私も行かせていただいたことがあるが、恐らく環境に関しての資料、特に山形を中心としたものは、恐らく山形大学よりもあるのではないか。それらが有効活用されるように、教育界の方、指導者の方などいろんな立場の人に情報提供できるようになればと思う。

板垣委員

前回の協議の後、話題になった三つの視点で、一つ目は山形らしさって何なんだろうなということ、2つ目は自主性を尊重するにはどうしたらいいかなということ、それから3つ目は高校で実際にどういったことが最も取り組めるのかなということについて、もう少し具体的



なことを色々考えてみた。

まず一つ目について、山形らしさということで、先程の大熊委員のお話を聞いて非常になるほどなと思った。山形は県土の7割が山林なので、やっぱり山林はこれから本当に大事にする必要がある。森林の荒廃や耕作放棄地の問題について、上手く産業の創出と教育が結びつけられないかと思う。

2つ目は、資料2の12ページの教職員の資質の向上についてだが、県教育センターでの研修を中心に実施していると記載されているが、実際に教育センターの環境の指導者養成講座の定員を聞いてきたところ、10名で2日間とのことだった。人数的には山形県の先生方は小・中・高、合わせて大体1万人ちょっとおり、その中の10名なので、どれだけ養成できるのか非常に心許ないが、続けていくのが大事なのだと思う。

ただ、学校現場としては、そういった講座に先生方を派遣できるかということ、なかなか日常の業務があって難しいというところがある。むしろ校内研修という機会を設けることができるのだが、その校内研修に先程の色々なアドバイザーの方だったり色々な立場の指導者を呼んで、研修した方が非常に直接的で、資質の向上という意味では先生方の理解も深まり、実現可能かと思う。そういった意味で12ページに校内研修の支援を盛り込んでいただきたい。

それから3つ目については、先程、阿部委員からもあったが、色々な事業があってコンテストがあって、全然わからないということがある。資料3のようにまとめていただくと非常にわかりやすい。ぜひ、学校などにも配っていただいて、学校としてこれに取り組んでみようと思えるような働きかけをお願いしたい。もしできれば、賞金なんかがあれば、非常に意欲が湧くのではないかと。また、産業高校は前回も申し上げたように、非常に取り組みやすいが、普通科、それから総合学科という高校で取り組むには、例えば部活動なんかも一つの手法だと思っている。学校全体でというのが難しければ、部活動単位で参加できるようなコンテストなど事業であった方が、具体的には進めやすいのではないかと。

大澤委員

2点、確認させていただきたい。資料2の3ページで、山形県環境教育指針を平成25年度以降改訂予定という記述があるが、教育庁の所管である生涯学習とか社会教育はこれに含まれるのか、それとも含まれないのか、お尋ねしたい。

あともう1点は、資料6の意見交換会の意見の2番で「個人的にPTAの役員をしているが、福祉や情報教育などや子どもに身につけさせたいことが学校に集中しており、その中から一つ選んで取り組むのが精一杯」という記載があるが、学校現場の先生の立場からどういう感じなのかお聞きしたい。

|                   |   |
|-------------------|---|
| <p>高校<br/>教育課</p> | <p>1点目の県環境教育指針については、来年度以降に改訂するという<br/>ことで組織の立ち上げや予算要求を進めている。学校以外の部分につ<br/>いては、前回は教育庁内の関係部署の担当が集まって改訂作業をして<br/>おり、生涯学習に関わることも盛り込まれる見込みである。</p>   |
| <p>今村会長</p>       | <p>2点目について、学校現場の視点から、佐藤委員、大泉委員いかが<br/>か。</p>  |
| <p>佐藤委員</p>       | <p>ここの資料6の2にあるとおり、様々な教育について学校で取り組<br/>んでいるという現状である。ただ、それで環境教育が全くなされない<br/>ということではなくて、本県で一番大きく掲げていただいている「いの<br/>ちの教育」を推進する中で、福祉教育、情報教育、環境教育などを絡め<br/>合わせて実践している。例えば生徒会で実施しているエコキャップ収<br/>集は、ボランティア活動でもあり、ごみ減量ということで環境にも関<br/>係しているし、それをワクチンに換えるというのは赤十字的な活動と<br/>も言える。</p> <p>それともう一つ、各教科の授業での環境教育は、取り組み状況が把<br/>握しにくいということがある。家庭科では調理で出た残りの油をどう<br/>処理するかとか、理科ではエネルギーに関してとか、かなり前、平成<br/>に入った頃から各教科で環境について取り組んでいる。</p> |
| <p>大泉委員</p>       | <p>総合的な学習の時間が減った学年もあり、学校の活動も色々あっ<br/>て、タイトだという御意見もあるが、決して校内の教育活動の中で軽<br/>んじているようなことは無い。児童会活動のごみ拾いだとか、ペット<br/>ボトルのキャップ集めなど自主的なことは結構どこの学校でも取り組<br/>んでいると思う。環境に関して、取り組みが低調になっているというわ<br/>けではない。ただ、各教科の中で、環境に関する学習に携わっても、<br/>点としてでしか押さえられていないなど感じている。「これはきっと<br/>5・6年の社会の環境の公害の話題に繋がるな」などと関連していける<br/>力が教師として大切だと思う。</p>   |
| <p>佐藤委員</p>       | <p>資料6の2番の意見について、どうしてこういう意見が出てきたの<br/>か理解できる面もある。エコキャップ収集という活動をどの教育に重<br/>きをおくかと、例えばPTAの方から問われれば、ボランティアを重<br/>視していくと回答をすれば、環境教育は、実践されていないの<br/>ではないかと捉えられる、という可能性は十分にあるのではないかと。</p>   |
| <p>今村会長</p>       | <p>環境は、色んな分野が絡んでいるので、その分ものすごく学際的で<br/>難しいが、逆に裏を返すと、だから何をやっても環境に通じる、同じ<br/>望ましい人間像を作っていくという点では何から入っていてもやれ</p>  |

るってということで、それを価値付けするか否かの問題ではないか。例えば福祉教育も情報教育も人づくりという面では環境教育と共通していて、環境とどこかで絡んでいる。だからこそ、今回のこの計画で、環境教育の柱に人間を取り上げて、まず人づくりを中心に共通項を提示したうえで、周りの様々な分野と連携を広げていくというスタイルを打ち出したことはとても大事である。本来そうあるべきだったのに、平成に入ってから、環境はどこかちょっとトピック扱いになって、もやもやしている部分なので、原点回帰した今回の計画は、本質を突いたものに近づいているといった意味では評価できるのではないか。

安積委員

少し関連して申しあげたい。私は私立学校ですっとやってきて、行政の方とお話しする機会がほとんど無く、今回とても勉強になった。教育施策とは何なのか、教育行政、行政とは何なんだろうかと、改めて考えた。教育は「人が人になる筋道をじっくりと踏んでいくこと」が命だ。「結果」を強制していくような業では、子どもは育たない。一人ひとり固有の子ども達が育つための教育の業の基本は、「深い原因」を与えていくことだと思う。その意味で、教育環境の整備を主務とする教育行政の、他の行政と違うところは、10年先くらいにやっと芽が出てくる、あるいは状況を変えていくような、今、この施策をやっておけば10年後にはやっとその芽が出てくるような、長いスパンに立つ施策なのだと思う。という施策をしっかりとらえて、状況そのものが激変している社会情勢なので、ますます、教育の本質に立った深い原因となるような施策を、行政の立場で出していただくことが大事だと、私は感じているところである。

そういった意味で考えると、私は今回のポイントは環境教育を本気で担う教員養成の充実だと思う。大きな話になるが、ここに出てきている施策は、もちろん一つ一つ大事だが、もっと大事なことがある。先程、阿部委員がおっしゃったように、せっかく提供しても関心の無い教員が多いというのが本当の現実だろう。もし子ども達に自然と人間への愛、そして、この実際住んでいる山形への愛を育みたいならば、まず、その教育を担う教員自身がそうならなければならない。今、子ども達が一番欲しくて、得られないものは、「直接、本物に触れる経験」だ。子ども達は今、情報社会、バーチャルなものに包囲された世界に生きているから、自分にとって確かなものが本当に確認できずに苦しんでいる。それに対して、山形は実に「本物」がある。それは一級の自然である。私の学校も原生的環境の中にある。あそこに3年間いるだけで、高校生は深い所から変わっていく。しかもそこで労働しながら、人間にとって大事なあらゆる要素が、体を通して経験されていく。3年生は、19日間、修学旅行で北海道に行く。その中の1週間は牧場や農場で、ご家族と生活を共にさせてもらいながら働く。それで

|             |  |
|-------------|--|
| <p>今村会長</p> | <p>大きく更に成長していく。山形県の新人の教員養成で、1週間くらい農業に取り組んではどうか。つまり教師自身が本物に直接触れないと、この自然の豊かさがどれほど教材として素晴らしいか、ということが分らないのではないか。そういうことを嘗々とやっていけたなら、10年先、山形県の公立学校の先生方の教師としての人間的資質が、大きく高まる可能性があると思う。</p> <p>最後のお話は非常に難しいけれど、そうなれば本当に変わっていくポイントであると思う。多分教員と、もう一つは、先程大熊委員のお話にもあったが、家庭や親もやはり同じように飛び込んでいくというのがやはり必要ではないか。安積委員の御意見はここにいる委員の究極の課題意識と理解したい。何かにつけ必要だという声をあげていただければと思う。</p> |
|-------------|--|

(4) その他

委員、事務局から特に発言はなかった。

(5) 閉会